

初學讀本

一名學のちりど

那珂通世校正  
石川倉次著

下

初學讀本

一名學のむしこ

第三

那珂通世 校  
石川倉次 著

せんごだい一

あゝ、ま、うつくしきちん

あり、

このちんハ、つくゑの上

あり、

こせハ、あよぐくよみ本

あり、

こせハ、それらのよむ本

くわいわだい一

あゝ、ま、うつくしい本が

ありませ、

あのちんハ、つくゑの上

はございます、

こせハ、しよぐくよみ本

であります、

こせハ、それらのも、

あり、

そこへ、あさらしいきふで  
あり、

そのふでハ、すぐりむこ  
の中ハあり、  
そせハ、かれらのなとひ  
ふであり、

きんどだいニ

あんちハ、よきてんき  
あり、

よむ本であります、

そこへ、あさらしいきふで  
があります、

そのふでハ、すぐりむこ  
の中ハあります、  
そせハ、何の人たちのな  
らひふであります、

くわいわだいニ

こんちハ、よいてんき  
であります、

かぜもあづり、よくそ  
せたり、

めうもちも、よきてんき  
あらん、

あんちハ、さくどつ、いづ  
こへゆきしや、

日れハ、昨日がくかうへ  
行きたり、

あんちハ、今日も、よくか  
うへゆく、

かぜもあづりで、よくそ  
れまゝ、

めうもちも、よいてんき  
であります、

ああん、さくどつ、どこ  
へまゐりました、

日さくハ、昨日がくかう  
うへ、まゐりました、

ああん、今日も、よくか  
うへ参ります、

あうり、日れハ、こんち  
も行く、

あうり、バ、いむらくま  
たまへ、日れも行くべし、

連語第三

其處ハ、きせいのあつく

ああり、

彼處ハ、よごせたるつく

ああり、

其のつくあハ、たのき机

さやう、日たくーハ、今日  
も参りませ、

そんなあ、さうーおまち  
下さい、私も参りませう、

會話第三

そこハ、きれいのあつくあ

が参りませ、

あそこハ、よごせたる机が

あります、

その机ハ、たかいつくあ

あり、

彼のつくあハ、ひくき机

あり、

そせハ、きせいのなる高き

机あり、

かせハ、よごせたる低き

机あり、

此處ハ、高くーて、きれい

ある机あり、

彼處ハ、低くーて、よごせ

であります、

あの机ハ、ひくいつくあ

であります、

そせハ、きせいのあ、たのき

机でございます、

かせハ、よおれさ、ひくい

机でございます、

こハ、たのくーて、きれい

な机でございます、

あそこハ、びくーて、よご

なる机あり、  
おせハ、高く且きせいか  
る机あり、  
かれハ、低く且よごれ  
る机あり、

連語第四

お、ま、大ある石と、小あ  
る玉とあり、  
こせハ、小あるうつく  
き玉あり、

せと机がおごいませ、  
こせハ、たうく、又きせ  
い  
な机でありませ、  
おせハ、ひく、又よご  
せ  
と机でありませ、

會話第四

こ、ま、大ある石と、小ある玉  
がありませ、  
こせハ、小あるうつく  
き玉でありませ、

そせハ、大あるおもき石  
あり、  
此處ハ、小皿と大皿あり、  
其處ハ、水呑と井あり、  
お、ま、氷水を入せたる  
水呑あり、  
か、こ、ま、血を入せたる  
中皿あり、  
こせハ、うつくしき水呑  
あり、

そせハ、大あるおもき石で  
あります  
お、ま、小皿と大皿がある、  
そこは、水呑と井がある、  
此處ハ、氷水を入せたる水  
呑がある、  
あまこ、ま、血を入れの中  
皿がある、  
おせハ、うつくしい水呑  
である、

かれハ、よごせうる中皿  
あり、

氷ハ、水のこりうるも  
のあり、

ふりき井の水ハ、こりら  
ぬものゝ、

井の中へ、井をおどし  
る下女あり、

連語第五

かれハ手の爪を切る小

あせハ、よごせた中皿で  
ある、

氷ハ、水のこりつたもの  
でありませ、

ふりいぬどの水ハ、あ  
らぬものでありませ、

井の中へ、井をおどした  
下女があります、

會話第五

こせハ手の爪をきる小

刀あり、

そせハ、瓜の皮をむく庖

刀あり、

左の手ハ、本をもち、右の

手ハ、ふでをもち、

力士の力ハ、凡人ふとぐ

せ、左手のちうらハ、右手

よおとる、

大工ハ、家を作り、土方ハ

土をもちぶ、

刀であります、

そせハ、瓜の皮を、むく庖

刀であります、

左の手ハ、本をもち、右の

手ハ、筆<sup>フデ</sup>をもちませ、

力士のちうらハ、凡人ふ

とぐせ、左手の力ハ、右手

よおとりませ、

大工ハ、家を作り、土方ハ

土<sup>チ</sup>をもちびませ、

土を運ぶを、土方といひ、家をつくるものを、大工といふ、士人を、土人といふべりらば、玉人を、玉人といふべり材木を、材木とかくある雨天を、雨天といふべり

土をこぶ者を、土方といひ、家を作る者を、大工といひませ、士人を土人といふべり、玉人を、玉人といふべり、材木を、材木とかいて、雨天を、雨天とかいて、

せ、

連語第六

机の上よりつくしき本あり、本の上より人の名をかきたる札あり、本の下より白き紙と、赤き紙あり、あんぢハ本をよむ、然り、本をよむ、

いけません、

會話第六

机の上よりつくしき本がありませ、本の上より人の名をいいた札がありませ、本の下より白いかみと、赤い紙がありませ、君ハ本をよみます、えい私ハ本をよみます、

かんぢハ、彼の紙の名を、  
知せりや、  
とせハ、よく其の名を、知  
らぬ、  
白き紙ハ、半紙ハシとして、赤  
き紙ハ、緋唐紙ヒタウシあるべし、  
机の上、手本と、双紙と、  
硯箱あり、  
硯箱の中ハ、硯と墨と、  
筆を入れたり、

あゝハ、何の紙の名を、  
知つてをりませう、  
私ハ、よくその名を、知り  
ません、  
白い紙ハ、半紙ハシで、赤い紙  
ハ、緋唐紙ヒタウシでありませう、  
机の上、手本と、双紙と、  
硯箱スダバコがありませう、  
硯箱の中ハ、硯と墨と、  
筆を入れてありませう、

なんぢハ、畫をのくう、  
否、とせハ、畫をバカ、と、  
字を書く、  
硯ハ、墨を摺スるなりぐみ  
具あり、  
筆ハ字、或ハ畫をかく道  
具あり、

連語第七

か松ハ、うつくしく、字と  
畫をのく、

君ハ、畫をうきませう、  
い、え、私ハ、畫ハうきま  
せん、字をかたませう、  
硯ハ、墨をのぐ道具ガグであ  
りませう、  
筆ハ、字、又ハ、畫をかく道  
具でありませう、

會話第七

かまつさんハ、みづか  
と畫をかきませう、

お竹ハ、よくさいほううを、  
あま、  
太郎ハ、よくさんどゆつ  
を、おぶゆ、  
次郎ハ、よく書物を、おぶ  
ゆ、  
おんちハ、今何を、よみて  
居るや、  
それハ、今初學讀本を、讀  
みて居る、

お竹さんハ、上手な針仕  
事を致しませ、  
太郎さんハ、よくそろを  
んを、おほえませ、  
次郎さんハ、よく書物を  
おほえませ、  
おんちハ、今何を、よんで  
おいであさる、  
それハ、今初學讀本  
を、讀んで居りませ、

汝ハ、何をあま、  
我ハ、習字をあま、  
汝等も、習字をあま、  
否我等ハ、復讀をあす、  
誰おても、ふくどくを、怠  
るべあらび、  
彼等ハ、みあ、べんきやう  
あり、  
我等も、劣らび勉強をべ  
し、

君ハ、何をいたしませ、  
私ハ、手習を致しませ、  
君方も、手習をしませ、  
否私共ハ、復讀をしませ、  
誰でも、復讀を、かこたつ  
てハ、いけません、  
あの人たちハ、皆勉強で  
ありませ、  
私共も、まけど、勉強い  
たしませ、

連語第八

かまの母ハ、よく裁縫サイオウを  
 あそ、  
 あまの父ハ、美ウツクしく字と  
 畫をゐく、  
 あまのうゝと、彼等ハ、あんな  
 せらゝ、人ふものをとを、お  
 ーふ、  
 あれ等ハ、まことと、善人ゼニン  
 あり、

會話第八

あの人オノカサシの母公ハ、上手に  
 針仕事を致オツサシしまた、  
 あの人オノツサシの父君ハ、みどろ  
 字と畫をかきまゐす、  
 さうして、あの人たちハ  
 丁寧テイネンふ、人ふ物事を、教へ  
 また、  
 あの人たちハ、まこととふ  
 よい方でありまた、

児童ジドウハ、内ウチに在りてハ、親オヤ

みつゝへ、兄弟ケイテイの中を、睦ムツ  
 しくせざるべからば、  
 まゝ、他人と交マシをまゐハ、  
 信切シンセツあらざるべからば、  
 かれハ、善ヨクくうぬ、小兒コニを  
 彼ハ、大キに虚言キョゲンして、宜ヨクい  
 うゝに、  
 小兒コニの時、虚言キョゲンをまゐるもの

子供コドモハ、内ウチでハ、おやまの

かへ、兄弟ケイテイの中を、よくせ  
 ぬがありません、  
 まゝ、人と交マシをまゐハ、信  
 切シンセツであくたハ、いけません、  
 あまハ、善ヨクくあい子供で  
 あります、  
 あまハ、大キにうゝををつ  
 いて、いけません、  
 子供コドモの時、うゝををつく者

ハ、後ハ盗とありまべし、ハ、後ハ盗とありまべし、  
ゆゑハ、汝等、苟且カクシハ、虚故ハ、君方、苟且カクシでも、虚言ウソを吐くべからで、  
をついてハ、いけません、

連語第九

學校ガクハ出で、ハ、書物を讀み、又手習をべし、○書物を讀まざれば、物事の道理を、知ると能ハば、○手習を為さざれば、文字の形を、書くことを得ば、○文字を書くことを得ざれば、人ハ手紙も、送ること能はず、○書物を、讀むことを得ざれば、人より、送らば、手紙も、讀むと能はず、○學校ハ到りてハ、

讀ミ書きの外ハ、又算術も學ぶべし、○算術を學ばざれば、物を、計ふることを得ば、○物を、計ふることを得ざれば、日用ハ、便利あらざるべし、

連語第十

書を讀ミ、字を書き、物を計ふる等の、諸藝シュゲイを學ぶを、學問といふ、○幼き時、學問をおこたる時ハ、成長して、無學文盲の人とあるべし、○無學文盲の人ハ、萬事ハ、不便利あり、○學問其他とべての事、勉強あらざれば、成るとあり、○勉強とハ、怠らぬことをいひ、怠惰とハ、勉強ぬことをいふ、○勉強ハ、幸

福の基ありて、怠惰ハ惡業のなぐめあり、○故ハ、  
勉強ハ志をべく、怠惰ハ戒むべし、○常ハ、學問  
をのめかして、運動を怠ると知ハ、身の養生ハ害  
あり、○運動ハ、身を動かし、氣を散り、体を養ふ  
をいふ、○養生の人ハ、常ハ、食物と飲物をえり、  
勉強の者ハ、常ハ、朝寢と晝寢をいましむ、

### 連語第十一

進むとをやきむのハ、退くとも亦をやし、○善人  
ハ、うしろみを忘れ、惡人ハ、恩を忘れ、○水ハ、方圓  
の器はあたかひ人ハ、善惡の友はよる、○善ハ小

ありといへども、おこるふべし、惡ハ小なりとい  
へども、あきとあきせ、○儉約ハ、家をかさむる要  
おこりハ、身をやぶる仇、○善を見てハ、速に行ひ  
惡を見てハ、怒さけよ、○高きは登るハ、低きより  
速きは行くハ、近きより速、○玉磨かざせハ、光  
あり、人學むざせバ、智あり、○倉の内の財ハ、朽る  
を有り、身の内の才ハ、朽るを無し、○千圓の金を  
つむといへども、一日の學問ふあらず、○月日ハ、  
矢の如し、一度去りてハ、またかへらず、○勉むる  
ときハ、何事も易く、怠るときハ、何事も難し、○愚

ある者ハ、遠き慮あり、故ハ必近き憂あり、○出づるときハ、為すべき事を思ひ、歸ると知ハ、為すべき事を考へよ、

連語第十二

朝ハ五時ハ起き、夜ハ十時ハ卧也、○働く時ハ、勞を厭わず、食を多と知ハ、飽くを求めず、○賢者ハ、己ハ智ありきを知り、愚者ハ、自智ありと思ふ、○賢き人ハ、事を習ひ、愚ある者ハ、物を教ふ、○知らぬハ、知りたる人ハ、問ふを耻ぢず、覺えし藝ハ、覺えぬ者ハ、誨ふるを厭わず、○急ハ走るとき

ハ、速ハ走るとき、躓くときあり、緩く歩むときハ、遅けれども、疲るゝと少し、○是べての事、前ハの急げハ、後ハ必疎あり、左をのぞくときハ、右ハ必低くある、○早く成るをハ、破せ易く、遅くあるをハ、堅固あり、○長きハほこむハ、反りて短きハ劣るとあり、弱きを守むハ、遂ハ強きは優るとあり、○學問を好め、智識を増し、家業を勵め、富を致し、○無益の物ハ、珍しといへども、弄ぶ處ハ、らむ、○有用の品ハ、賤しといへども、棄つべからず、

連語第十三

一俵の米も、一粒より成る、○一手ふ散トて、二手  
ふ集む、○春ふ花あきをの、秋ふ菓實あし、○速く  
熟する菓實ハ、腐ること亦なやト、○二兎を追  
ふものハ、一兎をも得ず、○鈍き砥石も、又物を鋭  
くす、○細き木ハ、火は燃え、太き木ハ、火を消す、○  
勉強と節儉ハ、幸福の手足、○貪欲ハ、人ふ益なく、  
己は害あり、○燈火ふ戯るゝ虫ハ、自其羽を焼く、  
○吝嗇ハ、人を損ト、己を害す、○渉らざトて、淺瀬  
を侮るべしとぞ、○難きことハ、今日做せ、明日も

易きはあらず、○他人の過失ハ、己の師匠、○樽を  
見て、酒の善惡をいふと勿れ、○常ふ畏懼せんよ  
りハ、一度危険を過ぐるふ如しとぞ、○做るとあき  
まのハ、不善を為す、○勞せざトて得るものハ、惟  
貧のこ、○蠟燭ハ、其の身を耗らして、外を照らし、  
○無智ふして、失錯し、失錯して學ぶ、○愚者ハ、猥  
小財を蓄へ、智者ハ、適宜ふ之を費す、○愚者の心  
ハ、口中にあり、賢者の口ハ、心中にあり、

連語第十四

深き川ハ、流るゝ小聲なく、淺きハ、却て噪がし、○

賢者ハ、愚者を知り、愚者ハ、賢者を知らば、○富貴  
 ありて、無智ある者ハ、金毛の、犬羊ハひとし、○齒  
 あり、をばたむ言ハ、復かへらば、○心ハ思ふて、舌  
 ハ語せ、○功能ある丸藥ハ、金箔を要せば、○手  
 淨けせバ、洗ふを要せば、○雞卵を割るハ、斧を要  
 せず、○惡行を許せば、善行を害せ、○惡人より、愛  
 され、ハ、憎まれ、より危し、○遊んで、人を傷め  
 ば、戯れて、人を辱しめ、○財を蓄へて、徳を積ま  
 ざる者ハ、金を脊負ひたる驢馬の、藷<sup>アサ</sup>を食ふガ如  
 し、○財ハ、菜圃の肥料の如し、散さば功あり、

○穢<sup>キナ</sup>き手ハて、人の汚<sup>キナ</sup>れ、指さるべし、○舌ハ、  
 鋼あり、ざざと、よく人を斬る、○臣僕ハ、金を給  
 せざば、臣僕自之を給を、○臣僕の善惡ハ、君主  
 不在の時ハ知らる、○商賣の財本あきハ、弓あり  
 て、矢あきガ如し、○主人たるものハ、時どいてハ、  
 盲あるべく、又聾あるべし、○思慮ハ、老たるを尊  
 び、手足ハ、若きを尊ぶ、○心中ハ、燃る火ハ、口ハ其  
 炎を顯はせ、○今日の後ハ、今日なし、○今日の一  
 時ハ、明日の二時より貴し、○人生の大費ハ、時間  
 を費する在り、

連語第十五

燧石も、打たざれば、火光を發せど、○晝あきバ夜  
あり喜あきバ、憂あり、○人の擔ふとる、荷の輕重  
ハ知れど、○張りつめとる弓ハ、竟ニ弱し、○薔薇  
の美あるも、刺ありきを得ど、○譽ハ、富より價貴し、  
○量るぐるときハ、袋を裂く、○破鐘ワダチハ、善き聲を  
發せど、○我人を敬へバ、人亦我を敬ふ、○友の為  
み勞をせむ、友の情を倍し、○狡猾ワカハ、財を得む  
バ、名望を失ふ、○賢く罵らんより、愚は黙るるハ  
如くぞ、○用ありて、始て器具の價を知る、○用あ

る鍵ハ、常ハ光澤あり、○高く賣るとき、欺く者  
らぞ、○常ハ多忙あるものハ、倣し得るとき、○  
苦を以て樂とせむバ、成功身は隨ふ、○快樂の夕  
おハ、憂苦の且あり、○蝸牛も勉むむバ、竟ハ高塔  
の頂上ニ達す、○曲むる杖ハ、曲むる影あり、○  
直ある杖ハ、水中ハ曲りて見ゆ、○事起らんとす  
る時ハ、其影必前ニ在り、○惡しき道ハ、旅せば、惡  
しき旅店ハ入らば、○壯健あらざれば、愉快あ  
く、德行あらざれば、幸福あり、○禽ハ獸ハ、欺くこと  
ハ蝙蝠の如く、夜の外出づることを得ど、○身を

起して身を倒さんより、寧ろ閑み坐するは如うぞ、  
○借金<sup>の</sup>為<sup>に</sup>起さんよりハ、費さざりて、寝ぬる  
ゐあうぞ、○舌を幽閑せざば、其身を禁固する  
とあり、○善行は遠ざくば、災害は近づく、○浅  
智ある者ハ、其智より深き萬事を批難せ、○水源  
濁せば、下流清まらば、

初學讀本 終り

明治十四年十二月廿七日板権免許  
同 十五年六月三十日出板

定價金七錢

著者

千葉縣士族

石川 倉次

千葉縣下總國千葉郡馬加村  
第二百十番地寄留

出版人

品川 金十郎

千葉縣下總國葛飾郡松橋  
三丁目百六十番地

發兌書林

東京西區九町二番地

品川 支店

千葉市場町百六十三番地

同 支店